



時は 2042 年、理夢華 22 歳の時であった。

温暖化により南極の氷が溶け出し、その下からはアトランティス遺跡が発見された。

理夢華はそこへテセウスと名付けた AI 搭載ステルス小型ドローンを飛ばし、遺跡を探索した。テセウスはデータを持ち帰り、それを理夢華の友人の奈美と話し合った。

奈美

「この前、小人とか巨人とかドラゴンとか、何かもうファンタジーの世界を見た感じね」

理夢華

「そうねえ。私も驚きよ」

奈美

「で、どうする？」

理夢華

「とりあえず例の先生に聞いてみましょうか。何か知ってるかも」

「けど、わたし達があの遺跡を探索したことは秘密よ」

奈美

「そりゃ、そうよね。そうしましょう w」

二人はこの世のことは何でも知っているという不思議な老人、臥麟の道場へと行った。

臥麟

「上は天文、下は地理。我はこの世の真理を解明する者である！」

奈美

「先生、いつもお元気ですね w」

理夢華

「今日も聞きたいことがあって」

臥麟

「なーんでも聞くがよい！」

二人はいつもどおり、台所へ行って掃除をし、お茶を入れる。

奈美

「先生、お茶が入りましたよ」

臥麟

「うむ」

お茶を飲み、ほっと一息つく。

理夢華

「先生は小人とか巨人とか竜っていると思いますか？」

臥麟

「おっと、いきなり変わった質問じゃのう」

奈美

「そうなの、私たち変わってるのよ w」



臥麟

「一言で言うと、それらはおる！」

理夢華

「なぜ、そう言い切れるんですか？」

臥麟

「まず、この日本という言う国は、オオクニノヌシとスクナヒコナという神さんが国をつくった。つまり、大きな神様と小さな神様でつくったのじゃ。これが巨人と小人の国産みじゃて」

理夢華

「けど、それって神話の話でしょ？」

臥麟

「『魏志倭人伝』は知っておるか？」

奈美

「三国時代に魏の国が書いたもので、女王卑弥呼が書かれているでしょ？」

臥麟

「そうじゃ。その『魏志倭人伝』には侏儒国（しゅじゅこく）というものが記載されている。侏儒とは小人と言う意味でな、小人の国があると書かれているのじゃよ」

理夢華

「そこに記されているなら、もしかしたら小人もいたのかもしれないのね」

臥麟

「“倭”という漢字の解釈は色々あるが、ワシは“矮小”の意で、日本人は昔から小さかったのではないかと思うておる」

奈美

「確かに、日本人は大陸の人と比べて少し小さいわよね」

臥麟

「その小さい倭人よりも更に小さい民族が侏儒であると思うのじゃ」

「また、アイヌ民族の話では、この日本に来た時にコロポックルという先住民がいたそうじゃ。このコロポックルも小人であると言われておる」

理夢華

「小人伝説ってたくさんあるのね」

臥麟

「世界を見ればノームと言う妖精やらなんやら、数えきれん程、小人はおる」

奈美

「じゃ、巨人はどうなんですか？」

「例えば、ネアンデルタール人のことを巨人と呼んだとか？」

臥麟

「巨人族は巨人族じゃ」

「巨人は大洪水時代以前にいた民族じゃよ」

理夢華

「大洪水時代ってのは、この前先生が言ってた、各地に残るとされる洪水神話が実際にあった時代のことよね。つまり、その洪水神話以前の民族が巨人族ってこと？」

臥麟

「そういうことじゃ」

「少し詳しく言うと、その世界規模の洪水は何回も起こっておる」

「その何回目じゃったかのう」



「ある時、地球上の水が増えてな」

理夢華

「水が増えたってどういうこと？」

臥麟

「月に隕石が衝突し、月から水が降って来た時期がある。もしくは彗星が地球に水をもたらしておる」

理夢華

「その水の量が増えるのと巨人とどういう関係があるの？」

臥麟

「水が増えるということは、地球の重力が大きくなるということじゃ」

「つまり、地球の重力は、太古、今よりも軽かった時期があるのじゃ」

理夢華

「なるほど、重力が小さいから身体が大ききな者が存在できたってことなのね」

奈美

「そして、大きくなった重力に適応したものが小人であったと・・・」

臥麟

「そういうことじゃ。その大洪水時代は重力が大きくなったとともに、食料供給も安定しなくなったため、人の身体は小型化し、環境に適応したというわけじゃ」

理夢華

「ということは、巨人や小人ってのは、相対的な呼び名ってことなのね」

臥麟

「そういうことじゃの。その巨人族と小人族が混血して、我々人間になったのじゃ」

理夢華

「にわかに信じることはできないけど、そうなのね」

奈美

「けど、ロマンあるわよね w」

臥麟

「じゃろ、じゃろ～」

「北欧神話やギリシャ神話にも巨人族はいてな」

「ティターン十二神というのじゃ」

奈美

「聞いたことあるわ」

臥麟

「ティターンというのは、英語表記では“タイタン”と言ひ、タイタニック号のように“巨大な”という意味となっていくのじゃ。つまり、ティターン族は巨人族を意味しておる」

奈美

「タイタンって召喚魔法で出てくる巨人ね w」

理夢華

「そういうキャラもあったわね w」

臥麟

「大洪水時代以降、巨人族は重力の小さい北極と南極、そして高山に住むようになったのじゃ」

「それがイエティやダイダラボッチなどの伝説になっておる」

奈美



「え～、ホントですか？」

臥麟

「さあてのう、ほっほっほ w」

二人は少し休憩し、臥麟にお茶を入れ直し、再び、座り直した。
理夢華は、遺跡の中にいたドラゴンらしき存在を思い出していた。

理夢華

「ドラゴンはいるのですか？」

臥麟

「こりゃまたマニアックな質問じゃな」

「・・・当然、おる w」

奈美

「やっぱり w」

臥麟

「西洋ではドラゴン、東洋では竜、西洋ではフェニックス、東洋では鳳凰、これらは実在するのじゃ」

理夢華

「東西によく似た伝説があるってことは、存在した可能性があるってことね」

臥麟

「そして、人間と恐竜が同時期に存在した時代がある。それがドラゴンじゃ」

「この竜退治もよくある神話じゃ」

「我々は竜族と呼んだりしたがの」

理夢華

「ということは、このドラゴンも巨人みたいに身体が大きいから、洪水神話以前の種族なのね」

臥麟

「そういうことじゃ」

この世には、巨人族・小人族が存在し、それらが混血して、今の人間ができた、とこの老人は語る。そして、その人族と竜族の戦いがあったのだと言う。この話は本当なのだろうか、と理夢華と奈美は思うのであった。